

日峰宗舜をめぐる二三の問題

加藤正俊

(一) 大徳寺の寺格と寺統の変遷

宗峰妙超の開創する大徳寺は、嘉暦元年（一二三六）十二月八日仏成道日を卜して開堂の式典を挙行し、龍宝山大徳寺を公称することになるが、この時点では寺格としてはまだ持明院統、大覚寺統のそれぞれの祈願所たるに過ぎなかった。しかるに元弘の乱により鎌倉の武家政権が滅亡すると、禅宗寺院の管理権を掌握した後醍醐天皇は、直ちに元弘三年（一二三三）八月二十四日、大徳寺を本朝無双の禅苑となし、公家一門の帰依する寺に相応しい、開山宗峰妙超の一流の相承する寺とする勅書を下賜され、さらに同年十月一日、同寺を「五山之其一」とする綸旨を、ついで翌元弘四年正月二十八日には、五山第一の南禅寺と相並ぶ寺格とする綸旨を下され、大徳寺を支える外護者の筆頭の立場を表明された。しかし後醍醐天皇の親政は、はやくも建武三年（一二三六）には崩壊し、同年十二月、天皇は吉野に移り、大徳寺は一朝にして大覚寺統の外護を失うことになった。

翌建武四年八月二十八日、持明院統の花園上皇は、改めて大徳寺を宗峰妙超の門弟により相承せしめ、他門の門弟の住することを禁ずる勅書⁽⁴⁾を下賜され、大徳寺の一流相承制を宗峰に命ぜられた。上皇は勅書の末尾に特に「勿敢違

失」の語を添えて、御意を強調されている。

しかしながら宗峰はこの年の十二月に寂を示すことになる。引き続き光厳上皇の院宣⁽⁵⁾によって、宗峰の法嗣の徹翁義亨が大徳寺に住山するが、宗峰の示寂によって花園上皇の帰依は、この頃宗峰のもう一人の弟子である関山慧玄の方に傾き、花園上皇もまた大徳寺外護のラインから離れることになる。

一方新たに権力を握った足利尊氏の武家政権も、後醍醐天皇の五山寺格の論旨を無視して、大徳寺を五山官寺制の中には取り入れず、暦応年度の五山の位次編成から、大徳寺をはずしてしまった⁽⁶⁾。

宗峰のあとを嗣いだ徹翁は、その晩年、足利義詮の外護を得て、徹翁開創の徳禅寺を大徳寺とともに、徹翁門徒の相承する度弟院にすることの御教書を得ている⁽⁷⁾。以後大徳寺は、宗峰門下の一流よりさらに範圍を狭めた宗峰・徹翁門下の一流相承利として、五山官寺制の規制から離れた林下の道を歩むことになった。

宗峰妙超の寂後五十年に当る至徳三年（一三八六）、將軍義満の代に、五山官寺の位次の改定が行われ、この時大徳寺は五山官寺の十利位に組み入れられることになる⁽⁸⁾。その間にどのような経緯があったのかは審かではない。

応永元年（一三九四）義満は將軍職を義持に譲ることになるが、義満の生存中は、義持は義満の行う諸施策に対して、何ら異をさしはさまなかった。しかし応永十五年（一四〇八）義満が没すると、叢林の規矩・制度に通曉していた義持は、義満の時代に放漫に流れ過ぎた叢林の諸制度を、引き締め直すことに意を注ぐようになる。例えば応永八年、絶海中津を厚遇するあまり、義満は五山第一位の天龍寺を第二位に降ろし、二位の相国寺を第一位に昇格させる処置をとったが、義満没後の応永十七年、義持は天龍寺をもとの五山第一位に復している。

この頃のことと思われるが、大徳寺が至徳三年に官寺の十利位に組みこまれながら、依然開創当初よりの一流相承制をとり続けていることに對して、義持は「官寺はよろしく十方住持制をとるべし」と、大徳寺側に門戸の開放を迫ったようである。そのような將軍側の抗議に對して、大徳寺側も熟慮審議の末、官寺たる以上は十方利もやむなしと

して、一応開創以来の一流相承制は解くことにした。しかし無条件に十方に門戸を開く十方利ではなく、十方の範圍を狭めて、宗峰の師匠、南浦紹明下の法系（大応派）まで門戸を開くことで、將軍側と妥協が成立したようである。以上は玉村竹二氏の推察であるが、おそらく推察の通りであろう。そのことによっては大徳寺第十八世東源宗漸、第二十一世香林宗蘭、第二十三世巨壑、第二十五世樗庵性才等、宗峰下の一流に該当しない、南浦派（大応派）下の宗匠がそれぞれ幕命によって大徳寺に住山してゆくことの説明がつくことになる。

しかしこのような方式によって大徳寺の住持が任命されることは、宗峰・徹翁の一流相承を掲げた大徳寺の建寺の精神に悖ることになる。この建寺の精神を守り抜くために、他派によって汚染された大徳寺を避け、近江に隠遁したのが「正統派」の華叟宗曇であったとされる。⁽¹¹⁾

正長二年（一二二九）八月、大徳寺二十六世住持に就任するのが養叟宗頤である。養叟は華叟の法嗣であり、常々華叟の自任していた宗峰下「正統派」の意識・心情には、深く通じていたと思われるし、大徳寺住持の変則的な選任方法が、花園上皇の「宗峰一流相承」の遺詔に背くことも充分承知していた筈である。幸い官利としての十方住持制を大徳寺に強要した將軍義持は、養叟が大徳寺に晋住する前年（応永三十五年、一四二八）に没していた。養叟は、官寺十刹位を脱して大徳寺本来の一流相承制の寺統に復することを、ひそかに画策する。そのことが具体化するのは永享三年（一四三二）のことであり、この経緯は、当時の蔭涼職をつとめた仲方中正や、鹿苑院主古幢周勝の書状『大徳寺文書』第二二五号、第一二六号、第一二七号）に委しい。以下に仲方中正が鹿苑院主古幢周勝に宛てた書状（第一二七号）を掲げてみよう。

紫野大徳寺事、證文等懸 御目候、重被仰出候趣、勝定院殿御計候事、無左右卒爾御改候はんする事、いかゝと思召候、此間被成十刹候事、既違彼開山素意候へは、寺位を不被改、門中無住持才候者、十方派亦住院可為如何様候哉、又任 院宣等置文、又今如門徒衆申入候、如元可為辨道所候歟、能々可有御思案、又は自餘長老達、御談

合候て、以状可有御申之由、被仰出候、○略

紫野證文大事物にて候間、此使者に不進候、恐惶敬白。

(永享三年)
九月五日

(鹿苑院)
侍者御中

(仲方)
中正(花押)

事の次第を述べると次のようになるであろう。大徳寺側が同寺を官寺の十利位より脱して、元の度弟院の弁道所にすることを、種々の証文類を添えて鹿苑僧録に願い出たので、僧録は蔭涼職の仲方中正をして將軍義教に、これを披露せしめた。これに答えて仲方は直ちに將軍の旨を奉行して、僧録に以下の如く伝えているのである。

「大徳寺の十利位への編入は、兄、義持の定めたことだから(官寺の位次改定は義満代の至徳三年であるが、十方住持制の実施を迫ったのが義持ということであろう)、卒爾に変更するのはどうかと思う。しかし十利位への編入は此間すかのことで、まだ長期にはわたっていないし、十利位編入がそもそも大徳寺開山の素意に違うことである以上、十利の寺位を改めないまま、若し門中に住持適格者が無い事態が起ったならば、十方派からの住院をどのようにすべきか。一方大徳寺には花園上皇の一流相承の置文もあるし、今また門徒衆からの申入れもあるが、大徳寺をもとの如く、単なる無資格(官利外)の弁道所にかえすべきかどうか、よくよく思案の上、他の五山の長老とも相談して、改めて書状をもって報告するように」。

この書状の提出日より五日後の九月十日、鹿苑院主古幢周勝は、大徳寺の申請通り官寺十利の位を取り消し、もとの如く弁道所たることを許す旨を、前述の仲方の古幢宛の書状を添えて、徳禪寺方丈(養叟宗頤)に伝えている。

このようにして大徳寺は、至徳三年(一三八六)より永享三年(一四三一)まで、四十五年間続いた五山官寺制の枠を離れ、以後他派よりの住山を排除して、宗峰一流の相承するもとの寺統に復することを得たのである。

(二) 日峰の大徳寺入寺への道程

大徳寺が官寺制の桎梏から解放された永享三年の翌年(即ち永享四年、一四三二)は、妙心寺にとっても記念すべき年となった。

妙心寺は宗峰妙超の弟子関山慧玄を開山とする寺であるが、関山を花園上皇に推挙したのは、上皇の参禅の師である宗峰と言われる。宗峰の寂後、上皇は花園の離宮を改めて正法山妙心寺となし、濃州山中に韜晦していた関山を招いて開山とする。暦応年間(一三三八~四二)の頃とされる。関山は修禅専一の禅匠ではあったが、世縁の粘著を嫌い、教団の経営にも敢て意を用いなかったようである。このような関山の性情によってか、徹翁義亨一派の面々は、関山を「不堪_三偏枯之情_二と呼んでいる。

徹翁はその晩年の応安元年(一三六八)、「大徳寺法度」を定め、その末尾の第十七条に、次の如く記述している。

一、宗得首座、恵玄蔵主事

先師深御勘氣之上者、更不_レ可_レ許_二門流之号_一、特惠玄蔵主事、大有_三子細_一、先師有_二遺言_一、各宜_三存知_二也、遺言置_二一紙_一也⁽¹²⁾

宗得首座は不明であるが、恵玄蔵主は関山である。先師(宗峰)の勘氣が何であるのかわからないし、遺言の内容も示されていない。当の関山自体既に寂後八年が経過しており、何を言われても全く預り知らぬことであった。

しかしこれより以後関山派は徹翁派によって徹底的に排除擯斥され、大徳寺への出入りも禁ぜられることになる。このようにして妙心寺は、大徳寺教団とも足利政権とも無縁の世界を、北朝(持明院統)系皇親の寄進の寺領を頼りに、関山、授翁、雲山、無因と続く寺統を維持して来たのである。

無因のあとを嗣いだのは、授翁の法嗣の拙堂宗朴で、応永初年の頃妙心寺住持となっている。応永六年（一三九九）冬、大内義弘が和泉界に拠つて所謂応永の乱を起し、幕府軍と一戦を交えた。『妙心禪寺記』⁽¹³⁾によると、拙堂は大内氏と師檀關係に在り、大内の軍に加勢したとされる。幕府軍の勝利のあと、將軍義満は拙堂を憎み、妙心寺を破壊して寺産寺領を悉く押収し、青蓮院に与えてしまった。応永七年のことである。当時の青蓮院門主は、後伏見天皇の皇子尊道法親王であり、花園上皇の甥に當つた。応永十年（一四〇三）尊道法親王が亡くなり、義満の息、義円が青蓮院の門主となると、三年前に青蓮院に与えられた妙心寺領が、今度は七箇所に分けて龍雲寺の延用宗器、その他に分付された。⁽¹⁴⁾

それから三十年が経過した永享四年（一四三二）の三月、当時南禪寺に塔所徳雲院を開いて退居していた延用宗器が、青蓮院より分付されたままの妙心寺領の中、開山塔微笑庵の敷地を南禪寺の宗利西堂（おそらく大応派正眼院に属する僧であろう）に譲渡することになった。⁽¹⁵⁾ 延用は示寂を目前にして、断絶のままの妙心寺の行末について深く考えるところがあつたのであろう。⁽¹⁶⁾ 開山塔の敷地の譲渡を得た宗利西堂は、直ちに各地散在の開山派の諸尊宿を集めて妙心寺再興のことを咨り、衆議の結果、当時尾張の犬山に瑞泉寺を開創して開山派の宗風を挙揚していた日峰宗舜を、妙心寺の後継者に當てることになった。

このようにして応永七年（一四〇〇）將軍義満の怒りによって潰滅させられた妙心寺は、三十二年後の永享四年、日峰の手によって復興の緒に就く。先述したように大徳寺が四十五年間にわたる十利の官寺から逃れて、再び宗峰一流の相承する寺統に復した翌年のことである。

何よりも日峰に幸いしたのは、室町幕府管領家の細川持之（春齋居士）の帰依を得たことであらう。持之の日峰帰信の経緯は不明であるが、『正法山六祖伝』によれば、嘉吉二年（一四四二）八月、日峰は持之臨終の席に招かれ、持之の「生死到来す、如何が回避せん」という問いに対して「本来生に生来無く、死に死去無し。更になんの回避とか

説かんや」と答え、持之はそれを聞き得て合掌瞑目して化したとされる。持之は死去したものの、管領細川家の日峰帰信の先例は、復興途上にある妙心寺にとって力強い後楯となったと思われる。

崇光院の皇子である明江親西堂が、日峰の後を嗣いで妙心寺の住持となるのは、細川持之死後の嘉吉二年十月二十六日より、翌嘉吉三年正月八日までの間のことであることが確められているが、その明江が妙心寺に入寺する機縁となったのは、当時の妙心寺住持の日峰の身辺に、大徳寺入寺の気運の起っていたことによるとされる。その辺の事情を示す史料として、『伏見宮家御記録』の「元二十五」冊のうちに収める後崇光院貞成親王の御消息の写しのあることを、玉村竹二氏の「初期妙心寺史研究補遺」⁽¹⁹⁾によって知ることができる。それによれば明江の妙心寺入寺は、日峰の大徳寺入寺により、妙心寺住持の席が空位となつてはじめて可能となる筈であり、貞成親王も日峰の大徳寺入寺後に妙心寺に住するようすすめているのであるが、どういう経緯か事実はそのように運ばず、日峰の大徳寺入寺の実現せぬうちに、明江の妙心寺入寺の方が先きに実現してしまつたようである。

当時の妙心寺の内部事情は明らかではないが、開山塔微笑庵の敷地を譲渡され、再興の事業が緒について、まだ十年の歳月しか経過していない妙心寺に、今まで無縁であつた、と言うよりは寧ろ擯斥されていた大徳寺へ、日峰を入寺させるような力があつたとは考えられない。若しそのような気運が生じていたとすれば、細川管領家の強力な後押しがあつたとしか考えられない。嘉吉二年八月の持之の死去によつても、日峰の大徳寺入寺の動きは頓挫せず、根強く続けられていることを、嘉吉三年八月六日の瑞泉寺看坊雲谷玄祥宛ての日峰書状や、文安元年（一四四四）と文安三年の『一休和尚年譜』⁽²¹⁾記載の事実によつて知ることができる。

それにしても日峰及び関山派は、妙心寺の伽藍の再建もまだ完了せぬ中から、大徳寺への入寺に、何故にこれ程執拗な意欲を示しているのであろうか。おそらく応永の乱後、將軍の権力によるとはいえ、余りにも簡単に妙心寺が破却されたことに対する、深い反省があつたのではなからうか。妙心寺は花園上皇開創にかかる北朝系の皇統の帰依す

る寺であつたが、世法に恬淡な関山の宗風の影響からか、未だ教団としての形態を充分に整えてはいなかった。妙心寺自体の成規も整つていなかったし一派を統率する法度も無かった。瑞世の道場に出世して、然るべき師匠に嗣法の香を焚き、天下に法統の正しさを顕揚する施設も持たなかった。三十二年にも及ぶ雌伏の間に、関山派の面々は今までの妙心寺の教団としての未熟さを痛感したのであらうと思われる。当時関山派が最も期待し得る瑞世の道場としては、宗峰開山の徳寺が予想された。そこには宗峰一流の法系の相承すべき旨を明記した、花園上皇宸翰の置文もあった。関山派も宗峰の法系を嗣ぐ一流に相違ない。関山派が徳寺へ入寺開堂し得る法的な根拠はここにある。このような法的な裏づけがなければ、いかに管領家といえども、無法なゴリ押しは許されない筈である。妙心寺と細川管領家は、花園上皇の遺詔を根拠に、日峰の出世開堂の許容をいちはやく徳寺に迫つたものと思われる。

しかし徳寺には既に見て来たように、徹翁によって定められた「徳寺法度」があり、そこでは関山宗峰の遺志ということで（理由はわからぬ）、関山の一派は徹底的に排除擯斥されていた。その上至徳三年（一三八六）から永享三年（一四三二）までの四十五年間、十刹の官寺として幕府の統制を蒙り、あまつさえ他派からの入寺を押しつけられて来た。それが徳寺の建寺の精神に違ふということで、苦心の末、もとの如く宗峰一流の相承すべき林下の寺統に復帰したばかりの時であつたから、関山派が入寺することに対しては、当然頑強な抵抗があつた筈である。その際、関山派を擯斥した「徳寺法度」の条項などは、徳寺側にとって、関山派の侵入を防ぐための強力な反証となつたであらう。両者の端に闘争いは史料の上では検証しがたいが、推理を働かせてみると、徳寺側の抵抗の行きつくところは、「関山が宗峰の法嗣であることは、宗峰の印可状によって証明されるが、日峰が宗峰の一流であるという証拠があるか。あるならば出してみよ」というようなことになつたのではなからうか。勿論妙心寺側は関山、授翁、無因、日峰と次第する法系の一流であること、従つて関山派は当然宗峰門下の一流であると主張したと思われるし、一流の証拠とされる印可状の如きは、個々密々に伝授されるものであつて、天下白日のもとにさらすべきものではないと主

張したであろう。「見せてみよ」、「いや見すべきでない」という論争があつたと想定される。関山派の法系が対外的に問題となつたのは、この時が初めてであろうし、宗峰下一流の証明となるべき印可状が、関山派にとって必要欠くべからざるものになつたのも、この時が初めてであろう。おそらくこのことは、両派教団内でも大きな話題となり、評判となつて伝わつて行つたと思われる。当時の教団内で語りつがれた話題を記録したものが、現在真珠庵に遺る『徹翁派関山派旁正記録』⁽²²⁾そのものであろう。そこで問題となっているのは、まさに授翁、無因、日峰等の印可状の有無であつた。

(三) 無因から日峰への印可状

玉村竹二氏は、はやくから妙心寺の襲蔵する無因から日峰への印可状に疑問を呈されていた。⁽²³⁾それは内容として、授翁が無因に与えたものと殆ど同文であり、文章も甚だ拙劣であり(ということとは、授翁から無因への印可状も同然ということ)、年記の記載も孟冬、上澣、孟春、下澣、仲冬などあるのは、宗峰妙超が関山慧玄に与えた附法状に、「元応二年仲夏上澣」とあるのに倣つたもので、そうあるもの程後世の追作のおそれが多いと思える、とされた。この伝に従えば授翁に与えた関山の印可状(延文元仲春日)も、無因に与えた授翁の印可状(応安四年孟春下澣)も、共に後世の追作ということになる。この中の関山から授翁への印可状(重要文化財指定)が後世追作の文書であることは、既に拙稿⁽²⁴⁾で説明したが、授翁から無因へ、無因から日峰への印可状については、今日まで手がつけられていない。現在授翁の筆蹟の遺るものは殆どなく、授翁の無因への印可状は、筆蹟の上から判断することは困難である。幸い無因には由緒正しい筆蹟が数種遺されているので、以下に年代順に列挙してみよう。

○ 応永三年(一三九六) 無因七十一歳

光沢庵の後継住職の選定方法を定めた「定置」書。海清寺藏。(同書の年記と署名部分を摘記しておく。以下同じ)

「應永三季歲次丙子黃鐘吉日 光沢住持比丘無因叟宗因(花押)」(写真㉑)

㉒ 応永五年(一三九八)無因七十三歳。

日峰宗舜に与えた自贊頂相。退藏院藏。

「無因叟宗因書于大秀軒 時于応永五季歲次戊申臘月念五日」

㉓ 応永十年(一四〇三)無因七十八歳。

春夫宗宿に与えた印可状。建仁寺常光院藏。

「時于応永十季歲次癸未正月鬼宿日 退藏住持比丘無因叟(花押)」(写真㉔)

㉔ 応永十一年無因七十九歳。

宗齡居士に与えた自贊頂相。龍安寺藏。

「為宗齡居士書之 無因叟 応永十一季歲次甲申正月日」

㉕ 応永十一年

宗航に与えた安名。退藏院藏。

「応永十一季三月廿六日 退藏住持比丘 無因叟宗因(花押)」(写真㉖)

㉖ 年月は不明であるが、日峰の為に書かれた山居偶作と題する偈頌(七言絶句)が二首あって、妙心寺と瑞泉寺に分蔵される。妙心寺蔵の分に「無因叟宗因(花押)」の署名がある。(写真㉗)

以上の無因の筆蹟を通して見てみると、無因独自の書式、書法というものが判明する。年記の年の字は必ず本字の季ねんを使用しているし、宗航に与えた安名以外は、歳次の二字と並列して干支を記入している。二点の自贊頂相は、損

定置

當庵住持職事宗因溘然之後者
 父侍者古上人遂影奉久而有其因
 緣先請此兩人而可充住持若有相
 違者受業之弟子中加評定可選
 其器直饒法者老僧達雖被異議
 仰其說不可用之若強議出未者在
 家出家之才子一味同心而堅可守中
 置旨有存子細如是書置者也仍
 隨置父旨而定住持必應通真鑑者
 也

應永三年

歲次
丙子

黃鐘吉日

光澤住持比叡寺因

(写真 ㊦)

自來尊宿依願力無不成就此事宿
 上人此一片語子細看未自始到
 終運度生志以大誓願參見
 諸方善知識月中聚團無不參
 次近來於余處晨夕扣問此事
 余於先師授翁和尚處商量底
 古人言句一奉示去一透得了也
 纖毫堅固德戶受用云異時定
 可有買金買銀者未須向十字
 街頭開鋪席云々

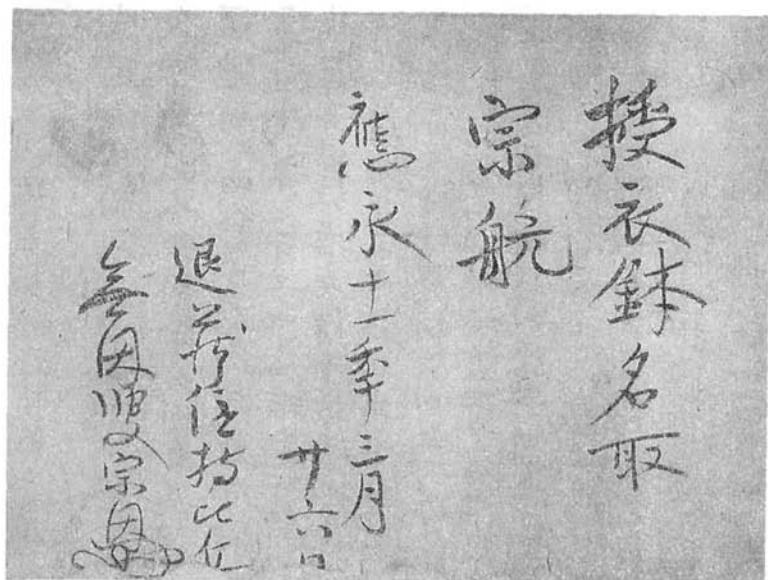
時于應永十年

歲次
癸未

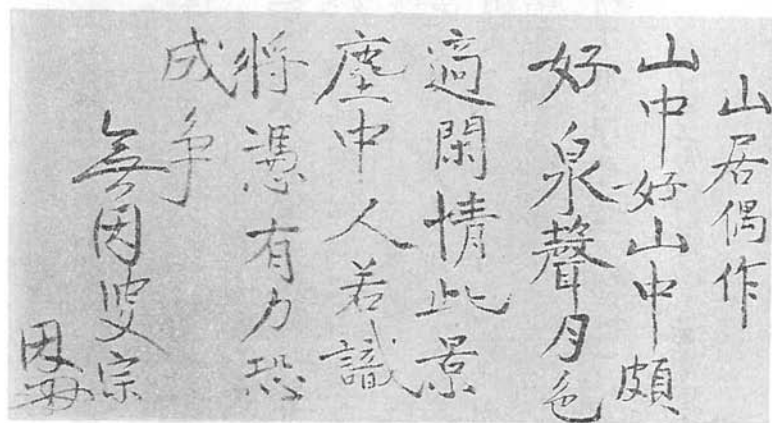
正月鬼宿

退藏住持比叡寺因

(写真 ㊦)



(写真 四)



(写真 四)

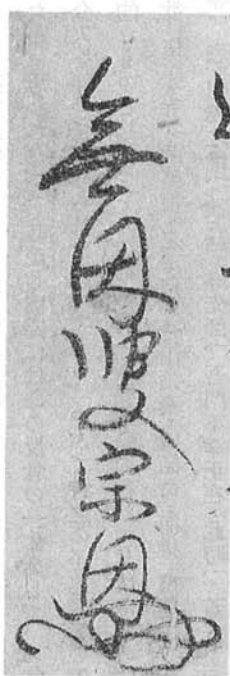
傷が甚しいため現在では判明しないが（そのため写真是不掲載）、署名の下に印が押さ
れていたかも知れない。しかし他の四点の
文書には必ず署名の下に花押が書かれてい
る。

このような無因の書法の特徴を確認して
から、改めて日峰への印可状を見てみると
（後出の写真Bを参照）、そこに無因独自の書
法が見当たらないし、無因の署名の崩し方も、
他の文書の署名の崩し方と異なる。

無因が生涯印可状を書かなかったわけでは
なく、既に見て来たように、応永十年春
夫宗宿に与えた印可状が建仁寺の常光院に
現存するし、日峰にも応永五年の時点で自
賛の頂相を与えている。これはいささかの
疑念もさしはさむ余地のない確かなもので
ある。玉村氏の推量によれば、日峰への印
可はむしろ頂相附与の直前に行われている
筈であるから、現存の印可状の日付、応永



妙心寺蔵、日峰へ
の印可状の署名。



退蔵院蔵、宗航安名
の署名。



妙心寺蔵、山居偶作の偈頌の
署名。

十三年はおかしく、応永五年頃でなければならぬとされる。⁽²⁵⁾

(四) 日峰の大徳寺入寺

もう一度日峰の大徳寺入寺の問題に立ちかえろう。嘉吉二年(一四四二)前後より始まった日峰の大徳寺入寺の運動は、管領細川持之の死去によって氣勢を殺がれたかに思われたが、しかし実際にはあの反骨の一体をして、「官命実不_レ可_レ拒也⁽²⁶⁾」と慨嘆させる程の、強大な権力の介入を伴って進められたようである。やがて持之の子息勝元の管領就任(文安二年三月)は、日峰の大徳寺入寺を決定的なものとした。その辺の事情を養叟宗頤の行状で見てもよう。

玄関山之徒宗舜、仮_ニ威於細川源公、脅_レ師欲_レ住_ニ本寺、師堅拒_レ之、曰、靈山翁稟_ニ国師命_ニ而排_ニ攢関山_ニ、而後其徒不_レ印_ニ足跡於_ニ此山_ニ者累_ニ三世_ニ、今也舜等、恣_ニ檀越之權_ニ、欲_ニ玷_ニ辱先師_ニ、吾門不幸正在_ニ此時_ニ、蓋忤_ニ當權_ニ者隘也、凌_ニ蔑先師_ニ者不恭也、隘與_ニ不恭_ニ吾所_ニ不_レ取也、不_レ如置_ニ跡且俟_ニ時焉。師深栖_ニ止紀之山中_ニ、(龍宝五祖伝)

養叟は日峰の大徳寺入寺に不満の意を表明し、紀州の山中に身を匿してしまった。

勅命によって日峰の大徳寺入寺が実現するのは、文安四年(一四四七)八月二十二日のことである。一連の入寺の法語が遺されている。⁽²⁷⁾

山門の偈に「虚堂八十再住山、山僧八十始入寺、関、無_レ処回避」とあり、日峰八十住山の事実が知られる。嗣法の香も焚かれている。嗣香の偈は以下の如くである。「此香、颺_ニ無夏甲裡_ニ多年矣、今日貧鬼思_ニ旧債_ニ、未免_ニ拈出_ニ、供_ニ養前住當山無因老漢_ニ、用酬_ニ法乳_ニ」。日峰は無因に嗣法の香を焚いて、法乳の恩を謝している。日峰の嗣香の偈は、関山派の法系が宗峰の一流(宗峰—関山—授翁—無因—日峰)であることの、十方への宣言に外にならなかった。

しかも日峰は、この時無因を前住当山（大徳寺）と呼んでいる。無因が応永十二年（一四〇五）十一月に大徳寺住持の綸旨を得ていることは、『妙心寺文書』四で知られるが、『正法山六祖伝』にも見られるように、固辞して起つことを肯ぜず、入寺には到っていない。⁽²⁸⁾この辺の事情はよくわからぬが、それらをすべて含めた上で、日峰が無因の法嗣であることを、白槌師として日峰入寺の席に臨んだ大応派の圓福寺住職が証明している。⁽²⁹⁾

(五) 雪江道号頌、無因印可状、日峰印可状

文安三年（一四四六）十一月、日峰は弟子正深の諱を宗深と改めさせた上で、雪江の道号を授け、号頌を与えている。日峰が大徳寺に入寺する前年のことであるが、既に八十歳を称している。（号頌の写真（A）参照）

日峰は唐代の会昌の法難の際、僧形を破って汚水に潜行し、渡し守りとなって為人渡世を止めなかった巖頭全義の故事を賦して、妙心寺の厳しい復興期を生きる雪江に相応しい号頌を与えている。雪江はこの後同参の先輩義天玄詔の峻峻なる鉗鎚を受けること十六年、義天示寂の一月前に当り、初めて印可状を付され、義天唯一の法嗣となり、応仁、文明の乱で焼滅した妙心寺の再中興に乗り出すことになる。雪江号頌の説明から妙心寺再中興にまで話が及んだが、もう一度号頌にもどうう。

雪江の号頌（仮りにAとする）を見ていて不思議なことに気づく。それは無因から日峰へ授与された印可状（仮りにBとする）と、筆蹟、筆法が似ていることである。印可状（B）の方が少し疾筆に流れ、号頌（A）の方が一字一字独立している違いはあるが、醸し出す雰囲気は似ている。例えばBの八行目の長養の養の字と、Aの最後の行の養源の養の字の特殊な崩し方、Bの九行目の不の字と、Aの二行目の不の字、Bの十一行目の孟冬の冬の字と、Aの六行目の仲冬の冬の字、これらは同一人物の筆蹟と断じてよい程酷似した筆法である。

氷花飄亂凍風寒
汚水浸頭行路難
一色明辺點不立
看來歲老激波瀾

宗深上人求別
祢援

雪江二字作偈以證云

又安第三

丙寅仲冬日

春源

日

中

十

歲

云

因みに妙心寺山内養源院（日峰の塔所）所蔵の日峰の書状を見てみよう。幸いこの書状（仮りにCとする）には閏二月念日の日付があるので、文安四年（一四四七）、日峰大徳寺入寺の年のものであり、雪江の道号頌（A）よりも一年後の書状とわかる。Cの二行目、四行目の冬の字、同じく二行目、六行目の無の字、二行目の為の字、八行目、十一行目の宗の字は、無因授与の印可状（B）末尾の年記署名「応永十三年孟冬上澣 無因叟宗 因為宗舜上人書」の各字と、まったく同一字形である。

更に本稿第二章で触れた嘉吉三年（一四四〇）八月六日の、瑞泉寺看坊雲谷玄祥宛ての日峰書状がある『汾陽寺文書』第六号、仮りにDとする。コピーが不鮮明なので一部を摘記すると、当時養源院の庫裡を造営中であつた日峰が、長板が入手できないので、瑞泉寺の茶堂の打板をはずして送るように命じ、代物は退蔵院のもので弁ずるよう申し渡した内容であるが、その中の本文九行目の「無長板候間」の無の字は、先述のCの書状中の無の字と同様に、無因授与の印可状（B）の署名の無と同一筆法である。同じくDの本文七行目「当院庫子」の当の字は、Bの八行目の「当知」の当字と同一字形である。Dの本文二十行目の宗安の宗の字は、Bの署名の宗因、Cの八行目、十一行目の宗菊の宗と同一筆法である。

更に『汾陽寺文書』第五号、青龍看丈（雲谷玄祥）宛の日峰書状（仮りにEとする）がある。そのEの本文九行目「山中之僧衆無等閑候」とある中の無の字、同じく十一行目の最初の為の字等もすべてBの同字と字形が合致する。どうやら日峰は、文安初年の前後、無因授与の印可状を自らの手で作製したようである。何故そのようなことをしたのか。問題を先き送ることになるが、その前にもう一つ検討しておかねばならない文書がある。

日峰は応永三十五年（一四二八）二月十三日に、弟子の義天玄詔に対して印可状を与えている。これは十六行にも及ぶ長文の堂々たるもので、妙心寺の襲蔵する印可状の中で、信用し得る最もはやい時期のもの（宗峰から関山への印可状を除いて）と言える。当時日峰は瑞泉寺にあって、関山派下の雲柄の指導に当たっていた。いつ再興されるか全く見通

世尊將正法眼藏財庫
摩訶大迦葉以東此土
西天列祖的傳到
今血脈所斷平地光
全体作用矣上人是
實東雲快脚踏實地
具透関眼還取居此處
處尚氣長養至脫今事

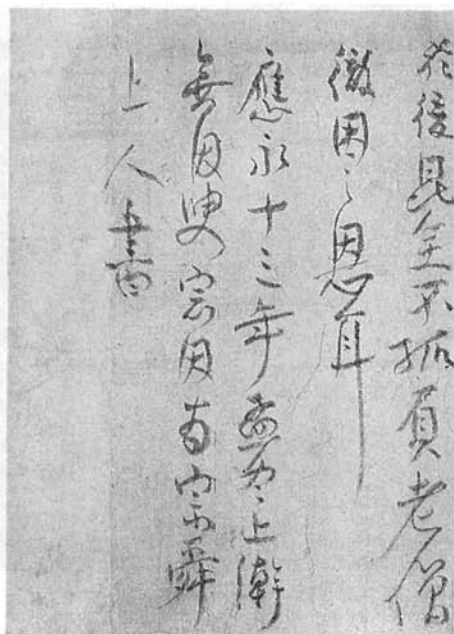
写真 B

世尊將正法眼藏財庫
摩訶大迦葉以東此土
西天列祖的傳到
今血脈所斷平地光
全体作用矣上人是
實東雲快脚踏實地
具透関眼還取居此處
處尚氣長養至脫今事

写真 C

しも立たない妙心寺の前途を憂いながらも、日峰の弟子達に託する期待は大きかったと思われる。日峰のそのような期待が、法嗣の義天への印可状にうかがわれる。

この日峰が義天に授与した印可状(仮りにFとする)と、文安三年(一四四六)十一月日峰が雪江に与えた道号頌(A)、並びに応永十三年(一四〇六)の年記を有する無因の日峰に与えた印可状(B)とを比較してみよう(先述したようにBは文安初年前後に、日峰が作製したものと思われる)。Fは日峰六十二歳の時の書であり、Aは八十歳の書、Bもその前後の書である。FとA・Bの間には十八年近い歳月のへだたりがあり、書風も異なる様に思われるが、例えばFの七行目、八行目、十四行目の不の字は、先きに指摘したAやBに見られた不の字と同一筆法であり、Fの四行目の言の字は、Aの五行目一番下の言と同字形、Fの最終行署名宗舜はB、C、Dの宗因、宗菊、宗安と同じ独得の崩しである。



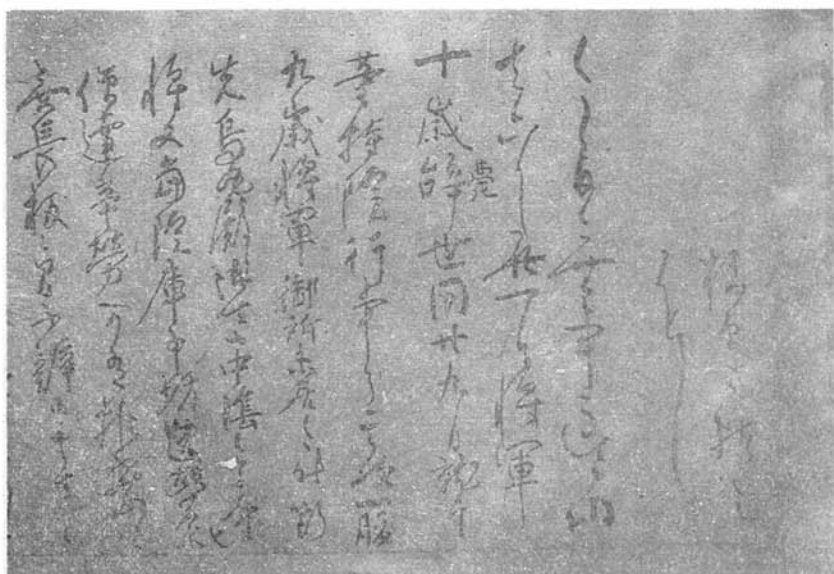


写真 D

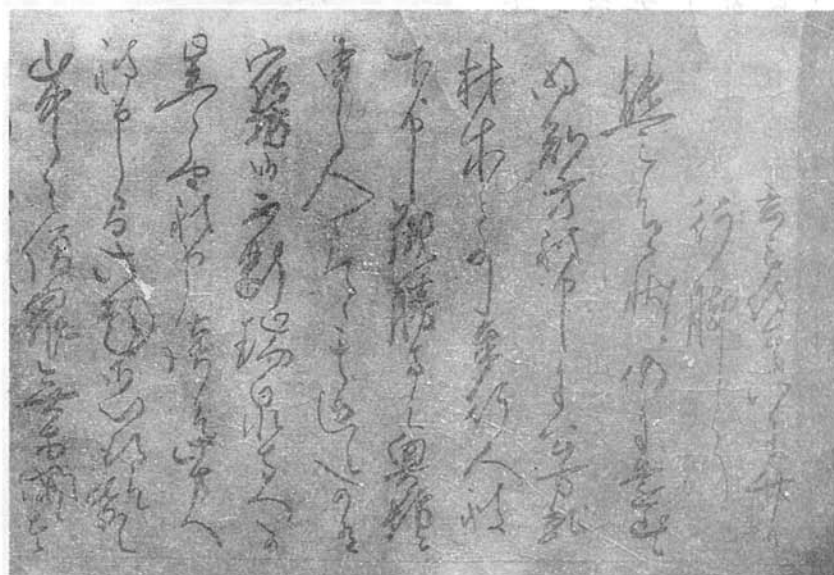
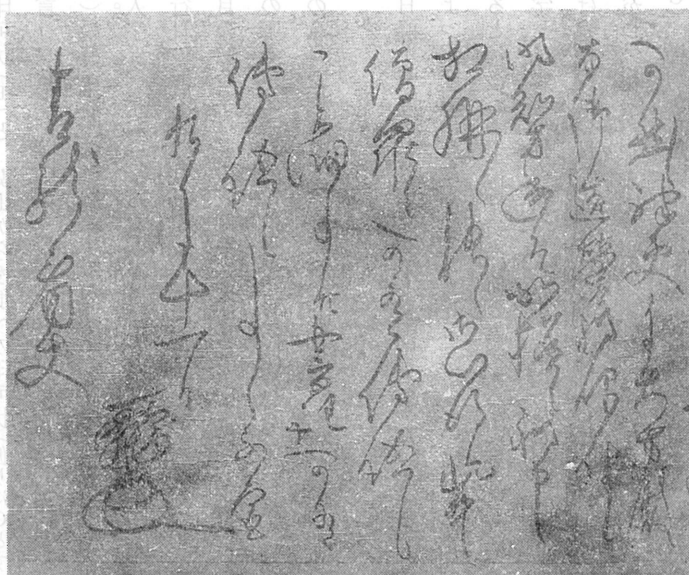
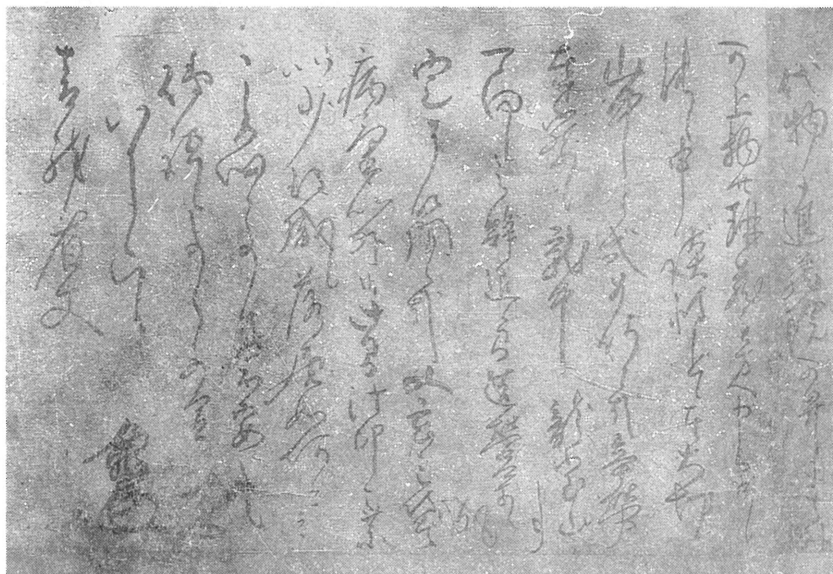


写真 E



(六) 関山から授翁への印可状

しかしもっとも衝撃的であったのは、日峰から義天への印可状(F)と、関山から授翁への印可状(仮りにGとする)が、同一人物の筆蹟であったという事実である。はっきり言うならば、関山から授翁への印可状も日峰が作製したということである。一一あげつらうまでもなく、両書(G、F)の持つ雰囲気は共通するが、念のために細く指摘すると、Gの一行目の上人の人の字は、Fの十一行目、十二行目の人字と、またG一行目の参の字とF一行目の参の字形は共通する。G二行目の偈、四行目の仏、五行目、六行目、十行目の何、十二行目の便など、それら各字の人(イ)偏は、Fの五行目、七行目の似、十行目の伊、十二行目、十四行目の僧の字などの人偏と共通する特徴を持つ。特にG、F両書の年記の仲春の仲の字は全く同形である。更にG八行の下から三字目の言の字は、Fの四行目、十行目の言の字と同じであり、Gの十三行目の今日の二字は、Fの九行目の今日と同形である。尚G、F両書の最終行の署名部分の関山叟と日峰叟の叟の字も同一筆致である。

このように見てくると、関山から授翁への印可状(G)は日峰から義天への印可状(F)と同様にまだ妙心寺復興のめども立たない応永三十年代、瑞泉寺在住時代の日峰の手によって作製されたものであろうという思いに到達する。

ことのついでにG文書と他の日峰筆文書とを対比してみると、Gの十二行目の為何の為字と、同じく最終行の為宗弼上人の為字は、Bの終りから二行目の為宗舜上人の為字、Cの二行目の無為、Eの本文十一行目の最初の為などと同形である。G三行目最初の此の字、六行目の此心などは、Cの二行目の此冬、Dの十八行目の此間、Eの本文七行目の此方、八行目の此趣の此の字と同じ筆致であることがわかる。

このように見てくると、妙心寺襲蔵の関山から授翁へ(G)、授翁から無因へ、無因から日峰へ(B)、という三代の

印可状の中、GとBは日峰の作製と判明する。残るのは応安四年（一三七二）孟春下辭の年記のある授翁から無因への印可状（仮りにHとする）だけである。私はことのなり行き上、Hも日峰の手に成るものと想像するが、H文書は意識的に書風が変えられているようで、同一筆者と断定する痕跡は少い。しかし強いて挙げれば、Hの二行目の此。土の此。は、G三行目、六行目の此。字と共通するものを感じるし、H四行目の在。と、G六行目の在。や、H六行目の報。恩の報。字と、G十行目の報。とは通ずるような気がするが、今は断定を控え、博雅の士の高示を待ちたい。

玄承感生於祥有年雪年
霜苦及冬玄自風塵卓動
承當宗猷可謂吾宗真種是
古德之理極忘情謂如何有
喻齊以遠般清寒之白の
不受人處玄直是托湯定如
生鐵鑄就相以文之我不重
先師道德之重先師不為我
詠破者為我詠破豈有合也
趙州之看教老僧隨手根機
播人自有三玄十二之教按也
老僧達事以少之事播人者
悔不得自是學者根性達金
不干老僧更思之老承書
玄承感生一也
應永十五 仲春十二日
宗仙 日峰の印可状

写真 G

宗舜上人參得本國成
 所了至極微細日
 内心一不離朱妙意
 天竺土來佛涅槃羅
 都微何最馬服子墮
 服 在河日成之何微
 者云過客者之自來留
 以何意入天者之何
 小窮盡生者之起計日
 佛涅槃思必何報者云
 臥戴天脚踏地自馬騰
 服者何不入弱便礼拜
 余河之笑日上人今日微
 大悟矣
 近父元付老日
 関山ひびき宗舜上人書

(七) 宗峰派下初期の印可状

妙心寺派教団内で印可状の授受が実体化するのは、先述した如く、日峰から義天への時をもって嚆矢とする。もと
 もと教団の形をなさない小教団では、印可状などなくても、暗黙裡に後継者は定められて行ったと思われる。関山か
 ら授翁へ、授翁から無因へ、無因から日峰への印可状は初めから無かったと思いたい。

玉村氏は日峰への印可状は、応永五年頃無因より授与されたと推定されているが、日峰がその印可状を失ったとは



写真 H

考えられない。印可の事実があったが、印可状の授受は無かったと思いたい。しからば応永十年（一四〇三）、無因から春夫に与えられた印可状はどのように解すべきか。玉村氏は日峰よりも春夫の方が師兄（すひん）であり、当時としては春夫の方が正嫡と思われていたであろうとされるが、これは無因から日峰への印可の時を、応永五年の頃と想定される氏の説と矛盾することになりはしないか。日峰の無因への参禅は、応永初年、無因の海清寺住持時代より始まっているのに対して、春夫の参禅は、応永三年以後のいつか、無因が河内の観音寺に転住してからのことである。参禅の時期からみても、印可の時期からみても、日峰が師兄であり、正嫡であることに間違いなく、この頃から既に日峰は、妙心寺の後継者に擬せられていたと思いたい。無因は関山派の後継者たる日峰に、応永五年自賛の頂相は授与したが、それまでの関山派の例に倣って印可状は書かなかった。春夫はもともと聖一派の莊嚴門派に属する河内交野の光通寺、別峰大殊の徒で法諱を大宿と称した。応永七年、將軍義満の命によって妙心寺は破却され、関山派にとって最悪の時代を迎えることになった。日峰の師弟（すてい）に当る春夫は、

敢えて闇黒の関山派に留って傍流の道を進むべきか、それとも十方叢林に転すべきか、二者択一の道を迫られていたと思いたい。

玉村氏の説によると、無因はもとも関山派と言うよりはむしろ大応派としての意識の強い人であったとされるが、応永十年弟子の春夫に印可状を授与し、大応派に属する博多の崇福寺（十刹）への出世を図ったようである。春夫は同寺六十五世として住山の後、洛東泉涌寺の側に普門山福聚院を開創（同院は後年建仁寺山内に遷る）して退居、五山派の人として生涯を終っている。

教団内に留って主流を歩む弟子には恬淡としていて、むしろ教団外に出て活躍すべき弟子に期待を寄せ、長大な印可状を授与した例として、われわれは宗峰妙超下の関山を思い出す。関山は宗峰に嘉暦二年（一三二七）に初相見後、僅か二年にして道号並びに号頌を授けられ、三年にして（元徳二年五月、一三三〇）本文十五行（一三九字）にも及ぶ長大な印可状⁽³¹⁾を授与され、その後宗峰のもとを去って韜晦の生活に入る。

一方宗峰のあとを継いで大徳寺一世となった徹翁は、大徳寺開創以前、宗峰の雲居寺止宿時代から宗峰に近侍し、宗峰の生涯を支えた弟子であったが、宗峰示寂直前の建武四年（一三三七）の臘月、本文四行（三八字）の簡単な印可状（「亭首座相従久矣、悟徹既人皆知之、宜_下為_二弟一世住持、慈育一衆、并付_二老僧常用法衣、深思好念矣」）を授与されているに過ぎない。宗峰示寂直前の印可状とは言え、関山への印可状と較べると、全くぶっきらぼうで無愛想なものである。近年の大徳寺教団は、余りにも簡略に過ぎるこの印可状を、印可状と呼ばず、後事付嘱状とするようであるが、代々の大徳寺教団が、この文書を印可状として取扱って来たことは周知の事実である。如何に簡略な印可状であろうと、徹翁が宗峰の正嫡であることは動かしがたい事実であり、また万人の認めるところでもあろう。

宗峰派下では、教団の外に出る人に対しては懇切な印可状を書いて与えると言う事が例になっていたのではなかろうか。教団内に留る人にとって、印可の事実は重要であっても、印可状の有無などは重要問題ではなかったと思われる。

る。事実宗峰、徹翁下の正統を歩んだと思われる言外宗忠にも、その弟子の華叟宗曇にも、各々の『行状』には印可の事実と印可状の片鱗らしきものはうかがえるが、印可状は遺されていない。(尚その『行状』も、教団の主流に印可状が定着した後の、伝記作者の作であることに留意する必要がある。)〔

宗峰・徹翁下の主流に印可状が定着するのは、華叟下の養叟宗願からであろう。応永二十一年(一四一四)正月十六日、華叟から授与された印可状が遺されている。関山派下の主流に印可状が授与されるのは、先述した応永十五年(一四二八)二月十三日のこと、日峰から義天に授与された印可状を最初とする。当時華叟は江州に小庵を構え、日峰は瑞泉寺にあって、共に弟子の育成に意を注いでいるが、教団の前途に希望を見出すことのできぬ、不安、失意の時代であったとも言えよう。

弟子の義天に印可状を与えて、教団再興の望を将来に嘱した日峰は、一方顧みて宗峰から関山への印可状しか遺されていない関山派下の現状に、胸を痛めたと思われる。平穩時の関山派ならば支障も生じなかったと思われるが、拠点の妙心寺を破却され、各地に散在してしまった一門の衆僧等を、関山派という教団意識の中に引き留めておく必要があった。関山から続く一流の法系の証明は、関山派の結束のためには当然欠くべからざる重要事に思われた。

日峰は応永三十年代の某日、筆を執って関山から授翁への印可状を認めた。

文安初年の前後、日峰の大徳寺入寺の気運のたかまりと共に、大徳寺派教団の日峰入寺反対の運動も熾烈となり、日峰の印可の有無がさかんに論議された。某日、日峰は筆を執って無因から日峰への印可状を認めた。その印可状の年記が、何故応永五年ではなく、応永十三年でなければならなかったのか、不可解である。

(1) 『大徳寺文書』第一号。

(2) 『大徳寺文書』第一四号。

(3) 『大徳寺文書』第一五号。

(4) 『大徳寺文書』第二号。

(5) 『大徳寺文書』第一七二号。

(6) 『扶桑五山記』二。

(7) 『龍宝山大徳寺誌』乾、「宸翰并繪旨等の写」の条、
『宝山編年略記』貞治六年九月十三日の条、『天応大現
國師行狀』、『龍宝五祖伝』等。

(8) 『龍宝山大徳寺誌』乾、『宝山編年略記』至徳三年の
条。

(9) 玉村竹二『日本禅宗史論集』下之二、「大徳寺の歴史」
三一九頁参照。

尚『南禅旧記』下に、以下の如き勝定院殿公文が収録
されている。

大徳寺住持職事、任先例可被執務之状如件

応永廿八年正月廿六日 從一位御判

宗蘭西堂

大上包宗蘭西堂 從一位御判

右至此時代、依為十利、以西堂住持如レ此

(10) 大徳寺十八世、二十一世、二十三世、二十五世の法系
図



峰翁祖一—大蟲全岑—月庵宗光—香林宗蘭

(11) 玉村『論集』下之二、「大徳寺の歴史」三一九頁。

(12) 竹貫元勝『日本禅宗史研究』付編、「大徳寺法度」参
照。

(13) 『正法山六祖伝』所収。

(14) 『正法山六祖伝』「妙心禅寺記」

尚、延用宗器は將軍義満の弟、一山派に属する。後に
天龍寺(四十三世)、南禅寺(八十六世)に住し、南禅
寺に徳雲院を開いて退居した。

(15) 『正法山六祖伝』「妙心禅寺記」

(16) 延用の示寂は永享四年八月八日である。

(17) 伏見—後伏見—光嚴—崇光—(伏見宮)—貞成親王

光明—後光嚴—後円融—後小松—称光

花園—直仁親王—(後花園)—後土御門

花園—直仁親王—(後花園)—後土御門

(18) 玉村『論集』下之二、「初期妙心寺史の二三の疑点」、

「初期妙心寺史研究補遺」、拙稿「初期妙心寺の世代と
その住持位次」(『禅学研究』六七号)

(19) 玉村『論集』下之二。

貞成親王の御消息の写しは以下の通りである。

一妙心寺事、花園院置文嚴重之間、尤可有御管領事候、
日峰大徳院入院候者、急可有御住候、萩原殿御遺跡管
領之間、如此令申候、非方之人自専、無其謂候歟、早
々御入院、可然存候也、恐々敬白、

嘉吉二

十月廿六日

進之候

(貞成親王法名)
道欽

- (20) 『汾陽寺文書』六号、文書の内容は拙稿「初期妙心寺の世代とその住持位次」(『禅学研究』六七号)に紹介した。

(21) 『東海一休和尚年譜』

文安元年(一四四四) 甲子

師五十一歳、関山一派皆被_レ擯斥_一以来、未_レ嘗_二山中往還_一、況亦可_レ鉤斧敢入_二其手_一哉、舜日峯以_二官命_一將_二住山_一、養叟和尚和_二会師_一、而欲_レ拒_二其入寺_一、師仮作_二門看_一、叟仮作_二日峯_一、問答數番、約彼負墮則不_レ許_二入門_一、師先横_レ棒跨_二門限_一、叟学_二峯来_一之儀、仮看_レ撈曰、自_レ門入者不_二是家珍_一、仮峯衝_レ口曰、如何是家珍、看乃曳棒曰、吞舟之魚不_レ遊_二龍門_一、峯払袖去、看曰、好去、西天路迢々十万里、師謂_二養叟_一曰、義勇既如此、官命実_レ可_レ拒也、叟撫然

『大徳寺法度』によって擯斥された関山派は、大徳寺山内の出入りすら禁ぜられていたのに、日峰が官命によって大徳寺入寺を企てているのを知ると、養叟は一休と語らってその入寺を拒む具体策をたてる。まず一休を看門の役に仕立て、自らは仮りに日峰となって入寺の問答を行うことにする。若し日峰が負墮すれば、入寺を許さぬことを前程として、日峰役の養叟が山門に進み問答數番、結果は日峰が払袖して去ることになるが、一休は、官命なれば所詮拒むことはできない、と匙を投げてしまふ。

文安三年(一四四六) 丙寅

師五十三歳、土州太平舜日峯参徒也、一日来謁問曰、徳山入_レ門便棒、其口未_レ合後句将来、師返詰曰、本有_二円成仏_一從_二甚麼_一処_二来_一、平曰、看々、師打曰、龍頭蛇尾漢、平無_レ語、蓋雖_二飽參自負者_一、一到_二師面前_一、則皆奪_レ機含糊退、所謂無尾也、獼猴子不_レ消_二一胡盧_一、

〔土州太平は舜日峯の参徒なり、〕とある土州太平は、日峰の法嗣義天玄詔のことであろう。義天は土州(土佐)の出身、土州天忠寺で出家、応永三十五年(一四二八)日峰の印可を得た後、一旦郷里に帰り、瑞巖寺に住している。太平とするのは、おそらく『年譜』作者の伝聞の誤りであろう。日峰の大徳寺入寺に備えて、弟子の義天があらかじめ状況の打診、あるいは偵察に来たのであろう。義天は一休より一歳年長である。尚「本有円成仏」の公案は、関山の得意とした公案である。

- (22) 『真珠庵文書』四所収。玉村氏の説によると、これは法燈派の銷翁□印という人が、諸寺につたわる巷説を聞き書きしたものらしく、文明前後の成立とされる。文書の本文は拙稿「大燈派下の正系をめぐって」(『禅文化研究所紀要』六)参照。

- (23) 玉村『論集』下之二、「初期妙心寺史の二三の疑点」
(24) 拙稿「関山慧玄伝の史料批判」(『禅文化研究所紀要』四)

- (25) 玉村『論集』下之二、「初期妙心寺史の二三の疑点」

(26) 註(21)参照。

(27) 『妙心寺派語録』一(『瑞泉寺史別巻』)

(28) 『正法山六祖伝』の記述は以下の如くである。「師八十五歳時、勝定院贈大相国義持公、開師道伽擬欲迎請相看、師以老病衰情不甘之、俄命肩輿歸老津陽海清寺、爰大德專使齋請狀到、師固辭不肯起」。無因八十五歳は応永十七年であるから、『妙心寺文書』四に収録する応永十二年の論旨とは五年の相違がある。『延宝伝燈録』の無因の条も、『正法山六祖伝』に従って応永十七年の論旨とする。

(29) 日峰の大德寺入寺法語の中に、円福寺住持に対する白槌の謝語がある。

円福寺は絶崖宗卓が先師南浦紹明を勧請開山として開創した寺で、錦小路大宮に在ったとされる。かつて無因が住した寺であり、弟子の日峰も起居を共にしたところである。日峰の大德寺入寺の際、白槌師をつとめた円福寺住持は不明である。尚これよりはやく、建武以来の屢次の政変と社会の混乱により、大德、龍翔、円福三寺の寺領がそれぞれ不知行になり、その結果仏閣が荒廃しているのをなげかれて、大德寺住持徹翁義亭をして興行するよう促された、延文三年(一三五八)八月四日の後光厳天皇の論旨(『大德寺文書』第一六二号)のあることが知られる。大德寺と円福寺との関係を知る上で重要な史料であろう。

(30) 玉村『論集』下之二、「初期妙心寺史の二三の疑点」

(31) 宗峰妙超から関山へ授与された印可状

此事卓犖挺拔清虚、乃仏乃祖惟以之而務、苟有其人、則於壁立万刃処、輕々推將去、到不回頭時節、直与箇惡辣手脚、全体作用、使它到勸絶白的之地、古人得旨之後、深隱堅韜、不必長養虚廓之聖胎、專亦有憂於後昆者也、上人既頓与本来相応、起居幽邃受用確乎。切須綿々不遇風、密々緊護惜、他時異日將吾道而光輝、便是孤負老漢微困之恩耳。

元徳二年仲夏上辭 宗峰叟妙超為慧玄藏主書